

令和6年度 川崎市学習状況調査 報告 概要

1 調査の概要

(1) 調査の目的

- ・児童生徒、保護者は、学習の取組を振り返り、課題を的確に把握し、学習改善に生かす。
- ・学校は、学校教育目標等で示した資質・能力の育成に向けて、調査結果を分析し、個に応じた指導や学校(学年)での授業改善、教育課程編成等に生かす。
- ・校長会、各研究(部)会は、教育委員会と連携して全市的な結果の分析と授業改善の具体的な手立て、個に応じた指導の手立て等を研究し、説明会や各研究(部)会の事業等で教員に伝達する。
- ・教育委員会は、全市的な児童生徒の学習状況を経年調査することにより、学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。

(2) 調査の概要

調査対象	○小学校第4学年～中学校第3学年
対象人数	○市内全市立小学校の第4学年 <u>11,903</u> 名、第5学年 <u>11,616</u> 名、第6学年 <u>11,810</u> 名 ○市内全市立中学校の第1学年 <u>9,419</u> 名、第2学年 <u>9,189</u> 名、第3学年 <u>9,130</u> 名
調査の内容	○教科調査 小学校 国語・算数 中学校 国語・社会・数学・理科・英語 調査の目的に基づき、学習指導要領に定める内容(前年度までの学習範囲) ○学習意識調査 児童生徒の学習や生活に対する意識等
実施時期	○小中ともに4月始業式翌週の火曜日～金曜日のうち各学校が設定する。学校の実態に応じて複数日で実施したり、学年ごとで実施したりした。令和6年度は4月9日(火)～19日(金)

2 分析方法について

(1) 教科に関する調査(教科調査)と学習意識等に関する調査(学習意識調査) 共通

① 4層分析について ※令和5年度から導入

教科調査は、川崎市内の受検者を、教科ごとに調査結果の高い者から並べ、学習意識調査は、小学校は2教科、中学校は5教科の合計点で並べ、上位からおおむね25%ずつをA～D層の4層に分けたもの。教科調査の数値はA～D層のそれぞれの平均正答率を示している。意識調査の数値は肯定的な回答割合(「わかる」「まあわかる」等)を示している。

・各層の学習等に関するデータや各層間の差、同一母集団の経年変化などに着目することで、取組の成果や課題を捉えることができる。

② 表の見方について

教科調査(4層分析におけるC-D層間の差の比較)

【小 2教科平均】 【中 5教科平均】 年度・学年	川崎市学力層別		
	C層	D層	C-D層 の差
令和6年度・小5	57.0	32.5	24.5
令和5年度・小4	68.6	42.3	26.3
令和6年度・小6	<u>54.7</u>	<u>31.7</u>	23.0
令和5年度・小5	63.2	39.4	23.8

C層の数値からD層の数値を引いた値
例 小6の場合 $54.7 - 31.7 = 23.0$
※背景色が薄い黄の行は令和6年度、
背景色が白の行は令和5年度の調査結果

学習意識調査(4層分析とD層の経年変化の比較)

年度・学年	肯定的な回答 割合(平均値)	4層分析の肯定的な回答割合			
		A層	B層	C層	D層
令和6年度・中1	71.7	89.9	77.9	67.8	50.5
令和5年度・小6	83.6	96.4	90.2	81.1	66.9
令和6年度・中2	66.0	90.1	75.4	59.3	<u>39.7</u>
令和5年度・中1	71.1	90.1	78.9	65.8	<u>50.2</u>
令和6年度・中3	65.9	90.5	77.2	59.7	36.9
令和5年度・中2	66.7	90.5	76.8	59.9	40.3

令和6年度のD層の数値から令和5年のD層
の数値を引いた値
例 中2の場合 $39.7 - 50.2 = -10.5$

-10.5

(2) 教科調査

① データの見方

例1 川崎の平均正答率と調査に参加した自治体全体(以降、全体と表記)の平均正答率を比較し、差を算出する。

例2 例1で算出した差を同一母集団で経年比較すること。

これらを通して、これまでの取組に対する分析を行う。

例1 (全体との比較)

R6	平均正答率		
	川崎	全体	差
小4	69.3	68.9	+0.4
小5	62.7	62.0	+0.7
小6	60.4	60.6	-0.2

小4の川崎と全体の平均正答率を比較すると、全体より川崎の方が0.4ポイント上回っている。

…比較すると値が上回っている(上昇している)

…比較すると値が下回っている(低下している)

※P7、8は見方が異なる

例2 (同一母集団の経年比較)

R5	川崎と全体の平均正答率の差		R6	川崎と全体の平均正答率の差
小4	-0.6	→	小5	+0.7
小5	+0.4	→	小6	+0.9

令和5年度の小4は、川崎と全体の平均正答率を比較すると全体より川崎の方が0.6ポイント下回っているが、同一母集団である令和6年度小5は0.7ポイント上回っている。

(3) 教科調査の分析の視点について

- ・全体との比較
- ・同一母集団の経年比較
- ・4層分析におけるC-D層間の差の比較

(4) 学習意識調査の分析の視点について

- ・4層分析とD層の経年変化の比較

3 調査結果の主な概要

(1) 教科調査結果 小学校 国語・算数 中学校 国語・社会・数学・理科・英語 ※値は平均正答率(%)

① 全体との比較(令和6年度の結果)

小学校

学年	2教科平均正答率		
	川崎	全体	差
小4	69.3	68.9	+0.4
小5	62.7	62.0	+0.7
小6	61.5	60.6	+0.9

学年	国語			算数		
	川崎	全体	差	川崎	全体	差
小4	67.1	66.5	+0.6	71.5	71.3	+0.2
小5	63.0	62.1	+0.9	62.4	61.8	+0.6
小6	64.9	64.2	+0.7	58.1	56.9	+1.2

小学校の各教科、各学年は、川崎と全体の平均正答率を比較すると、全体より川崎の方がすべての項目において0.2～1.2ポイント上回っている。

中学校の各教科、各学年は、川崎と全体の平均正答率を比較すると、全体より川崎の方が国語、数学、英語の3学年と社会、理科の中3において0.3～4.8ポイント上回っている。

中学校

学年	5教科平均正答率		
	川崎	全体	差
中1	65.0	65.1	-0.1
中2	56.2	54.7	+1.5
中3	57.7	55.5	+2.2

学年	国語			社会			数学			理科			英語		
	川崎	全体	差	川崎	全体	差	川崎	全体	差	川崎	全体	差	川崎	全体	差
中1	62.3	62.0	+0.3	49.2	49.6	-0.4	65.8	65.3	+0.5	58.1	59.6	-1.5	89.8	89.1	+0.7
中2	70.6	69.2	+1.4	50.9	51.2	-0.3	53.5	50.0	+3.5	47.9	49.0	-1.1	58.2	54.0	+4.2
中3	71.1	70.0	+1.1	53.3	52.6	+0.7	47.1	43.3	+3.8	51.6	51.0	+0.6	65.5	60.7	+4.8

●2教科及び5教科平均正答率は、小4、小5、小6、中2、中3で全体を上回る。

2教科及び5教科平均正答率の川崎と全体の差に着目して比較すると、小学校は調査を実施したすべての学年、中学校は中2、中3が全体より川崎市の方が上回る結果であった。

② 同一母集団の経年比較(令和5年度と令和6年度)

小学校 (2教科平均正答率) 中学校 (5教科平均正答率)

R5	川崎と全体の平均正答率の差
小4	-0.6
小5	+0.4
中1	-1.1
中2	+0.3

R6	川崎と全体の平均正答率の差
小5	+0.7
小6	+0.9
中2	+1.5
中3	+2.2

令和5年度の小4は、川崎と全体の平均正答率を比較すると全体より川崎の方が0.6ポイント下回っているが、令和6年度小5は0.7ポイント上回っている。

令和5年度の小5は、川崎と全体の平均正答率を比較すると全体より川崎の方が0.4ポイント上回っているが、令和6年度小6は0.9ポイント上回っている。

令和5年度の中1は、川崎と全体の平均正答率を比較すると全体より川崎の方が1.1ポイント下回っているが、令和6年度中2は1.5ポイント上回っている。

令和5年度の中2は、川崎と全体の平均正答率を比較すると全体より川崎の方が0.3ポイント上回っているが、令和6年度中3は2.2ポイント上回っている。

●小中ともに川崎と全体の平均正答率の差は昨年度よりよい結果となっている。

同一母集団における平均正答率の川崎と全体の差に着目して経年で比較すると、令和5年度より令和6年度の方がよい結果となっている。

③ 4層分析におけるC-D層間の比較

・同一母集団の経年比較

※「A、B、C、D層」の欄は平均正答率(%)を、「C-D層の差」の欄はC層とD層の差(ポイント)を表している。

【小 2教科平均】 【中 5教科平均】 年度・学年	川崎市学力層別		
	C層	D層	C-D層の差
令和6年度・小5	57.0	32.5	24.5
令和5年度・小4	68.6	42.3	26.3
令和6年度・小6	54.7	31.7	23.0
令和5年度・小5	63.2	39.4	23.8
令和6年度・中2	48.3	29.0	19.3
令和5年度・中1	60.9	40.9	20.0
令和6年度・中3	50.5	28.0	22.5
令和5年度・中2	50.8	31.3	19.5

昨年度に比べて差が
1.8ポイント狭まった。

昨年度に比べて差が
0.8ポイント狭まった。

昨年度に比べて差が
0.7ポイント狭まった。

昨年度に比べて差が
3.0ポイント開いた。

□ …C-D層間が前年度より狭まっている

□ …C-D層間が前年度より開いている

※P7の見方

●小5、小6、中2は、昨年度に比べてC-D層間が狭まる。

同一母集団における平均正答率のC-D層間の値に着目して経年で比較すると、経年比較が可能な4学年中、小5、小6、中2の3学年が昨年度に比べてC-D層間が狭まる結果であった。

●中3、昨年度に比べてC-D層間が開く。

同一母集団における平均正答率のC-D層間の値に着目して経年で比較すると、中3が昨年度に比べてC-D層間が開く結果であった。

・C-D層間と他のA-B層間、B-C層間との比較

【小 2教科平均】 【中 5教科平均】 年度・学年	川崎市学力層別			
	A層	B層	C層	D層
令和6年度・小4	91.7	79.4	66.3	39.6
層間の差		12.3	13.1	26.7
令和6年度・小5	88.7	72.8	57.0	32.5
層間の差		15.9	15.8	24.5
令和6年度・小6	88.5	71.2	54.7	31.7
層間の差		17.3	16.5	23.0
令和6年度・中1	86.2	72.7	60.7	40.2
層間の差		13.5	12.0	20.5
令和6年度・中2	83.2	64.4	48.3	29.0
層間の差		18.8	16.1	19.3
令和6年度・中3	84.6	67.8	50.5	28.0
層間の差		16.8	17.3	22.5

表の見方について

【小 2教科平均】 【中 5教科平均】 年度・学年	川崎市学力層別			
	A層	B層	C層	D層
令和6年度・小4	91.7	79.4	66.3	39.6
層間の差		12.3	13.1	26.7

A-B層間の値(ポイント)
 $91.7 - 79.4 = 12.3$

B-C層間の値(ポイント)
 $79.4 - 66.3 = 13.1$

C-D層間の値(ポイント)
 $66.3 - 39.6 = 26.7$

 …比較すると値が開いている ※P8の見方

●すべての学年でC-D層間が他のA-B層間、B-C層間より開く。

4層分析の各層間の値に着目すると、実施したすべての学年でC-D層間が他のA-B層間、B-C層間より開く結果であった。

(2) 学習意識調査の結果 4層分析とD層の経年変化の比較

① 学習の理解度

小学校 同一母集団4層分析(4教科平均)

年度・学年	肯定的な回答割合(平均値)	4層分析の肯定的な回答割合			
		A層	B層	C層	D層
令和6年度・小4	85.4	94.7	89.7	84.4	72.5
令和6年度・小5	85.3	96.2	90.7	84.0	70.5
令和5年度・小4	85.6	94.7	90.1	84.7	72.6
令和6年度・小6	83.9	96.0	90.3	81.7	67.7
令和5年度・小5	84.6	95.5	90.1	83.6	69.4

-2.1

※質問に対する肯定的な回答(「よくわかっている」「まあわかっている」)をした児童生徒の割合(%)

中学校 同一母集団4層分析(5教科平均)

年度・学年	肯定的な回答割合(平均値)	4層分析の肯定的な回答割合			
		A層	B層	C層	D層
令和6年度・中1	71.7	89.9	77.9	67.8	50.5
令和5年度・小6	83.6	96.4	90.2	81.1	66.9
令和6年度・中2	66.0	90.1	75.5	59.3	39.7
令和5年度・中1	71.1	90.1	78.9	65.8	50.2
令和6年度・中3	65.9	90.5	77.2	59.7	36.9
令和5年度・中2	66.7	90.5	76.8	59.9	40.3

-10.5

※「令和5年度・小6」の数値は、「令和6年度・中1」と受検者数が約2,400人異なるため参考値とする。

●小学校A層の肯定的な回答割合は約95%

小学校はA層の約95%が「授業がよくわかっている、まあわかっている」と肯定的な回答をしている。

●小5のD層の経年変化は-2.1ポイント

同一母集団のD層における肯定的な回答割合は、小5が、同一母集団である昨年度の小4より2.1ポイント低下している。

●中学校A層の肯定的な回答割合は約90%

中学校は、A層の約90%が「授業がわかる、まあわかる」と肯定的な回答をしている。

●中2のD層の経年変化は-10.5ポイント

同一母集団のD層における肯定的な回答割合は、中2が、同一母集団である昨年度の中1より10.5ポイントと大きく低下している。

② 学習に取り組む態度に関する児童生徒の意識

・わからないことはそのままにせず、わかるまで努力している。

年度・学年	肯定的な回答割合(平均値)	4層分析の肯定的な回答割合			
		A層	B層	C層	D層
令和6年度・小4	75.1	83.4	76.6	73.2	67.0
令和6年度・小5	72.8	84.6	74.8	71.1	61.0
令和5年度・小4	76.0	83.8	78.4	74.6	67.1
令和6年度・小6	69.9	85.8	75.3	64.3	54.4
令和5年度・小5	73.2	85.4	77.1	69.9	60.3
令和6年度・中1	68.0	81.6	73.1	63.5	53.9
令和5年度・小6	71.1	86.1	75.8	66.8	55.9
令和6年度・中2	61.5	79.4	66.9	56.4	44.0
令和5年度・中1	70.6	82.5	74.3	68.1	57.5
令和6年度・中3	64.8	83.6	71.9	59.3	44.5
令和5年度・中2	61.9	81.3	65.4	55.9	45.0

-6.1

-13.5

・授業で習ったことはそのまま覚えるのではなく、その理由や考え方も一緒に理解しようとしている。

年度・学年	肯定的な回答割合(平均値)	4層分析の肯定的な回答割合			
		A層	B層	C層	D層
令和6年度・小4	72.1	80.1	73.9	71.8	62.4
令和6年度・小5	70.4	85.3	74.2	65.8	56.3
令和5年度・小4	74.9	81.4	76.9	74.0	67.4
令和6年度・小6	70.3	87.8	77.0	65.8	50.8
令和5年度・小5	71.2	85.7	75.8	67.2	56.3
令和6年度・中1	66.9	81.8	72.5	63.7	49.5
令和5年度・小6	71.8	88.2	77.6	67.2	54.7
令和6年度・中2	62.4	80.5	67.9	57.9	44.1
令和5年度・中1	69.4	83.2	75.3	66.3	52.6
令和6年度・中3	65.5	85.4	71.2	61.1	44.8
令和5年度・中2	62.9	81.5	68.4	57.7	44.1

-11.1

-8.5

2つの質問ともに同じ傾向が見られる。

- ・わからないことはそのままにせず、わかるまで努力している。
- ・授業で習ったことはそのまま覚えるのではなく、その理由や考え方も一緒に理解しようとしている。

●中3は上昇している。

経年比較が可能な学年の中で、**中3は**、同一母集団である、**昨年度の中2より上昇している**。(下段の質問では、A-D層すべてで上昇している。)

●D層、小5と中2に着目

D層に着目すると、同一母集団の比較では、**小学校の中では小5、中学校の中では中2が低下している**。

※「令和5年度・小6」の数値は、「令和6年度・中1」と受検者数が約 2,400 人異なるため参考値とする。

4 調査結果のまとめ

(1)調査結果の成果(●)と課題(●)

・令和5年度からD層の児童生徒に着目し、次の手立てを講じてきた成果と課題をまとめる。

「何がわかっていて、何がわかっていないか」について、児童生徒が自覚できるようにする。
わからないことに対して諦めず、粘り強く取り組むために、ねらいを明確にしたペア学習やグループ学習を取り入れる。
いつでもGIGA端末等を活用して、学習に取り組める環境を整備する。

① 調査結果の成果

- 2教科及び5教科平均正答率の川崎と全体の差に着目して比較すると、小学校は調査を実施したすべての学年、中学校は中2、中3が全体より川崎の方が上回る結果であった。
- 同一母集団における平均正答率の川崎と全体の差に着目して経年で比較すると、令和5年度より令和6年度の方がよい結果となっている。
- 同一母集団における実施教科平均正答率のC-D層間の値に着目して経年で比較すると、経年比較が可能な4学年中、小5、小6、中2の3学年が昨年度に比べてC-D層間が狭まる結果であった。

② 調査結果の課題

- 同一母集団における平均正答率のC-D層間の値に着目して経年で比較すると、中3が昨年度に比べてC-D層間が開く結果であった。
- 4層分析の各層間の値に着目すると、実施したすべての学年でC-D層間が他のA-B層間、B-C層間より開く結果であった。
- 「理解度」「学習に取り組む態度に関する質問」の同一母集団のD層における肯定的な回答割合の比較では、小5と中2が、同一母集団である昨年度の小4と中1より大きく低下している。

・川崎と全体の平均正答率の比較において、前年度より良い結果となったことやC-D層間が狭まった学年があり、取組の成果が出ている。

・小5、中2のD層は、授業において学習内容の定着や「わかる」を実感することなどが十分ではない。このことが正答率の低下につながると考えられる。

・D層に着目した継続的な授業改善と、小5、中2の前年度となる小4、中1について、注視していく必要がある。

5 今後の手立て

D層の児童生徒(特に小4と中1)に着目

全ての児童生徒が「わかる」を実感できる
授業の実現を目指す

学習状況調査の結果を生かした授業改善の視点

1 「何がわかっていて、何がわかっていないか」について、児童生徒が自覚できるようにする。

- ① 既習の活用を促し、見通しを持たせる。
・児童生徒の「わからない」、「困った」を大切にする。
- ② 理由や考え方に着目させる。
・児童生徒の「どうして」「なぜ」を大切にする。
- ③ 振り返りを充実させる。
・児童生徒の「そうか」「なるほど」を大切にする。

2 わからないことに対して諦めず、粘り強く取り組むために、ねらいを明確にしたペア学習やグループ学習を取り入れる。

- ① 題材や課題を的確に捉えるようにする。
・題材や課題を捉える視点を持たせる。
- ② 自分の考えを持たせる。
・解決するための手段や方法を持たせる。
- ③ 友達と解決するなど他者と協働する場面をつくる。
・「わかった」という実感を持たせる。

3 いつでもGIGA端末等を活用して、学習に取り組める環境を整備する。

- ① 自発的な取組を促す。
・学習意欲を高めるために、自分自身の課題を把握させる。
- ② 保護者、家庭と共有する。
・家庭学習の改善、充実を図る。
- ③ GIGA端末を活用する。
・学校や家庭でドリルパークなど学習ソフトやダッシュボードの活用を促す。

6 関係部署の分析

(1) 教育政策室 政策推進

【学習意識調査から】

質問番号：【123】(4・5年)、【126】(6年)、【139】(中1)、【144】(中2・3)
質問内容：将来の夢や目標を持っている。

<肯定的な回答割合・4層分析>

年度・学年	川崎市	A層	B層	C層	D層	A-D の差
令和6年度・小4	86.6	86.9	87.3	88.4	83.6	3.3
令和6年度・小5	84.1	82.5	83.2	85.5	85.4	-2.9
令和5年度・小4	86.8	87.1	87.7	87.8	84.5	2.6
令和6年度・小6	79.1	78.2	78.3	79.8	80.2	-2.0
令和5年度・小5	83.3	82.9	83.5	83.2	83.7	-0.8

年度・学年	川崎市	A層	B層	C層	D層	A-D の差
令和6年度・中1	80.1	79.3	79.3	80.0	81.9	-2.6
令和5年度・小6	79.3	78.9	79.0	79.7	79.8	-0.9
令和6年度・中2	69.4	68.9	68.3	69.0	72.1	-3.2
令和5年度・中1	80.0	77.4	80.4	80.3	82.1	-4.7
令和6年度・中3	67.5	64.3	66.5	68.7	70.9	-6.6
令和5年度・中2	67.8	65.2	67.9	68.3	69.7	-4.5

<分析結果>

「自分をつくる」の視点では、学ぶことや様々な体験を通して、自立の主体である自分自身に対して自信を持ち、自己を高めていくことが大切である。調査結果では、質問123について、経年変化に着目すると学年が上がるとポイントが低下していることがわかる。中学2年生で大きな変化が見られることから、現実的な中学卒業後の進路選択への意識が強くなってくことで夢を思い描きにくくなっていることも考えられる。また、小4以外はA層よりD層の肯定的な回答の割合が高く、夢や目標をもつことに、学習の理解度が影響するものではないことが考えられる。質問126については、すべての学年でA層よりD層のポイントが下回っており、学習の理解度が自己肯定感の高まりへの影響として大きいことが考えられる。

質問番号：【126】(4・5年)、【129】(6年)、【142】(中1)、【147】(中2・3)
質問内容：自分には、よいところがあると思う。

年度・学年	川崎市	A層	B層	C層	D層	A-D の差
令和6年度・小4	83.9	88.0	85.5	83.9	78.0	10.0
令和6年度・小5	80.9	84.6	82.0	80.0	77.0	7.6
令和5年度・小4	84.5	87.5	86.1	84.5	79.9	7.6
令和6年度・小6	77.3	80.7	78.6	77.6	72.3	8.4
令和5年度・小5	80.1	83.8	81.3	80.4	74.9	8.9

年度・学年	川崎市	A層	B層	C層	D層	A-D の差
令和6年度・中1	78.3	81.2	80.3	77.4	74.4	6.8
令和5年度・小6	75.8	78.8	78.3	75.4	70.7	8.1
令和6年度・中2	74.3	77.9	75.5	74.2	69.9	8.0
令和5年度・中1	75.5	78.2	75.5	76.1	72.3	5.9
令和6年度・中3	74.5	77.7	75.6	74.3	70.8	6.9
令和5年度・中2	71.4	75.8	73.4	69.5	67.1	8.7

※「令和5年度・小6」の数値は、「令和6年度・中1」と受検者数が約2,400人異なるため参考値とする。

【学習意識調査から】

質問番号：【122】(4・5年)、【125】(6年)、【138】(中1)、【143】(中2・3)
質問内容：学級みんなで協力して何かをやりとげ、うれしかったことがある。

質問番号：【125】(4・5年)、【128】(6年)、【141】(中1)、【146】(中2・3)
質問内容：人が困っているときは、進んで助けている。

<肯定的な回答割合・4層分析>

年度・学年	川崎市	A層	B層	C層	D層	A-D の差
令和6年度・小4	89.0	91.2	91.2	90.2	83.5	7.7
令和6年度・小5	90.0	91.2	90.7	90.4	88.0	3.2
令和5年度・小4	89.9	92.0	91.1	90.6	85.8	6.2
令和6年度・小6	87.6	87.9	88.7	88.3	85.6	2.3
令和5年度・小5	89.3	90.9	90.0	90.8	85.4	5.5

年度・学年	川崎市	A層	B層	C層	D層	A-D の差
令和6年度・中1	87.4	89.9	88.9	87.1	83.7	6.2
令和5年度・小6	87.9	89.2	89.1	89.0	84.5	4.7
令和6年度・中2	85.7	86.6	87.1	86.8	82.7	3.9
令和5年度・中1	87.0	88.9	87.8	87.5	83.6	5.3
令和6年度・中3	86.2	88.7	89.0	85.9	81.7	7.0
令和5年度・中2	85.4	88.1	87.1	84.6	81.7	6.4

年度・学年	川崎市	A層	B層	C層	D層	A-D の差
令和6年度・小4	91.9	93.6	93.1	93.2	87.6	6.0
令和6年度・小5	92.5	93.9	93.1	93.5	89.8	4.1
令和5年度・小4	92.1	94.4	92.9	92.9	87.9	6.5
令和6年度・小6	91.4	91.8	92.0	92.1	89.6	2.2
令和5年度・小5	91.5	93.4	92.1	92.4	88.3	5.1

年度・学年	川崎市	A層	B層	C層	D層	A-D の差
令和6年度・中1	92.3	93.2	92.7	92.5	91.2	2.0
令和5年度・小6	90.6	92.2	91.7	90.8	87.6	4.6
令和6年度・中2	90.0	90.2	91.0	90.7	88.6	1.6
令和5年度・中1	91.5	92.1	91.7	92.4	89.6	2.5
令和6年度・中3	89.5	90.2	90.2	90.0	87.8	2.4
令和5年度・中2	89.6	89.9	90.5	90.7	87.1	2.8

<分析結果>

※「令和5年度・小6」の数値は、「令和6年度・中1」と受検者数が約2,400人異なるため参考値とする。

「みんな一緒に生きている」の視点では、お互いの人格を尊重し、協力、協働して社会を積極的に形成していく力を身に付けることが大切である。調査結果では、質問122については前年度と同程度の結果だが、前年度よりポイントが下回っている学年もあり、今後の変化に注視していく必要がある。また、学級で協力して何かをやりとげる活動をする際、達成感や充実感を味わえるように指導の工夫を図っていくことも大切となる。質問125においては、すべての学年で肯定的な回答の割合が89ポイント以上であり、他者への気遣いやサポートの意識が高いことがわかる。また、前年度と比べると、全学年でA-D層の差が小さくなっている。

<実態に応じた取組の工夫>

「キャリア在り方生き方ノート」「キャリア・パスポート」の活用

●「キャリア在り方生き方ノート」

「自分をつくる」では、友達からの意見も聞いて自分のよさに気付くページや自分の個性を見つめながら将来を考えるページ等がある。将来の夢や目標を、自分の好きなことや得意なことを踏まえて、「なりたい自分の姿」で描くことができるようにキャリア形成を支援していくことが大切である。



●「キャリア・パスポート」

児童生徒が「なりたい自分の姿」を描くために、自分自身を見つめることができる手立ての一つである。学校段階を越えて、夢や希望をもち、個性、持ち味を最大限に発揮しながら生きていくための能力や態度を育てることができるように意識して取り組むことが大切である。児童生徒一人ひとりが自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりしながら、自分の変容や成長を自己評価できるように活用することが大切である。いつのどの活動で活用するとより有効であるかを考え、年間計画等に明確に位置付けていくことも大切である。



「社会に開かれた教育課程」の実現に向けたカリキュラム・マネジメント

地域の行事への参加や社会参画の意識を高めていくためには、自分の力で現実の社会問題を解決できるという主権者としての意識を育てることが大切である。川崎市制100周年を契機にした「わたしたちのまち川崎」の学びを充実させ、コミュニティ・スクールを活用した地域連携を推進することで、児童生徒が社会や世界とつながり、よりよい社会と幸福な人生を自ら創り出していけるようにカリキュラム・マネジメントの充実を図る。

(2) 教育政策室 人権・多文化共生教育

【学習意識調査から】

「人権尊重教育を通して、育てたい資質・能力」
川崎市子どもの権利に関する条例に係る質問内容から
 代表的な質問番号:【65】
 質問内容:私は話し合いのとき、考えや意見を進んで出している。

〈肯定的な回答割合・4層分析〉

年度・学年	川崎市	A層	B層	C層	D層	A-D の差
令和6年度・小4	69.2	75.4	70.6	66.8	63.8	11.6
令和6年度・小5	65.5	74.6	67.2	62.4	57.9	16.7
令和5年度・小4	72.1	78.9	72.4	70.5	66.5	12.4
令和6年度・小6	58.8	68.4	61.4	56.1	49.4	19.0
令和5年度・小5	66.0	73.0	68.9	64.0	58.0	15.0

年度・学年	川崎市	A層	B層	C層	D層	A-D の差
令和6年度・中1	54.9	64.9	57.6	51.5	45.5	19.4
令和5年度・小6	60.2	69.4	63.7	57.5	50.4	19.0
令和6年度・中2	50.4	60.1	52.9	47.4	41.5	18.6
令和5年度・中1	56.0	65.9	57.1	53.8	46.9	19.0
令和6年度・中3	52.4	59.8	56.4	49.3	44.6	15.2
令和5年度・中2	53.5	62.9	56.4	50.2	44.6	18.3

※「令和5年度・小6」の数値は、「令和6年度・中1」と受検者数が約 2,400 人異なるため参考値とする。

＜分析結果＞

「考えや意見を進んで出している」ことは、「子どもの意見表明権」の保障(こども基本法、川崎市子どもの権利に関する条例)の観点から大切である。代表的な質問【65】では、学年が上がるにつれポイントが低下していくことから、思春期特有の仲間同士の評価を強く意識する傾向や他者との関わりに消極的な傾向も見られる。

これらのことから、学校生活においては、多様な他者との関わり合いや学び合いの機会を意識的に設け、違いを比べたり、認めたりして、児童生徒自身が自分の意見を再構築し、対立を恐れずに伝えることや、相手の考えや思いを丁寧に受け止めるコミュニケーション技能(人権尊重教育の資質・能力)が必要である。また、生徒一人ひとりにとって安心・安全な学級、学校づくりをしていくため、教職員が生徒の意見表明をしやすいように、主体的な学びができる環境を整えることや、授業の中で間違いや少数派の意見を否定せず、耳を傾けていくことなどが求められる。

こういったことを通して、児童生徒が学校生活の中で、自分のことも周りの友達のこと大切にする経験を、授業や特別活動などと関連を図りながら育成していくことが大切である。

＜実態に応じた取り組みの工夫＞

- ・児童生徒の意見や思いを受けとめるための環境整備
 「考えや意見を出す」ことには、「話すこと」に加えて「書くこと」も含まれます。また「考えや意見を出さない」ことも意見表明権の現れだとされている。「考えや意見を出さない」児童生徒の背景を教員が想像することが大切である。
- ・児童生徒の発達の状態、生活背景を考慮
- ・考えを見直したり深めたりする時間の保障
- ・「子どもの権利学習」の実施
 「川崎市子どもの権利に関する条例」に示されている「参加する権利」について学ぶ機会を設けることで、エンパワメントされ権利の実現に向かうきっかけになる。

権利学習資料



※参考 1. 人権教育の指導方法等の在り方について(第三次とりまとめ)2008年 文部科学省
 2. 子どもの徳育に関する懇談会「審議の概要」2009年 文部科学省

(3) 情報・視聴覚センター

【学習意識調査から】

質問番号:【133】(小学校)、【154】(中学校)
質問内容:GIGA端末は学習の役に立つと思う

<肯定的な回答割合・4層分析>

表1 令和6年度に小学校段階の肯定的な回答割合・4層分析

年度・学年	川崎市	A層	B層	C層	D層	A-D の差
令和6年度・小4	91.9	95.6	93.5	92.4	86.1	9.5
令和6年度・小5	92.7	94.0	94.4	93.3	89.1	4.9
令和5年度・小4	91.4	94.0	92.7	92.5	86.2	7.8
令和6年度・小6	92.2	92.0	93.7	93.5	89.7	2.3
令和5年度・小5	91.9	93.5	93.6	93.2	87.4	6.1

表2 令和6年度に中学校段階の肯定的な回答割合・4層分析

年度・学年	川崎市	A層	B層	C層	D層	A-D の差
令和6年度・中1	93.1	94.0	94.9	93.9	89.5	4.5
令和5年度・小6	91.5	91.7	92.5	92.3	89.4	2.3
令和6年度・中2	89.0	90.6	90.0	89.9	85.6	5.0
令和5年度・中1	91.3	92.8	92.5	92.1	87.8	5.0
令和6年度・中3	90.7	90.9	91.9	92.0	88.1	2.8
令和5年度・中2	88.2	89.0	90.2	88.7	84.8	4.2

【学習意識調査から】

肯定的な回答は、
「ほぼ毎日」「週3回以上」

質問番号:【134】(小学校)、【155】(中学校)
質問内容:前の学年までの授業で、GIGA端末などの ICT 機器をどの程度使用しましたか

<肯定的な回答割合・4層分析>

表3 令和6年度に小学校段階の肯定的な回答割合・4層分析

年度・学年	川崎市	A層	B層	C層	D層	A-D の差
令和6年度・小4	54.1	49.3	51.6	56.8	59.0	-9.7
令和6年度・小5	61.6	63.3	60.3	60.8	62.2	1.1
令和5年度・小4	53.8	46.0	52.3	55.1	62.0	-16.0
令和6年度・小6	69.1	72.0	71.0	67.5	65.8	6.2
令和5年度・小5	63.4	62.7	63.6	64.0	63.2	-0.5

表4 令和6年度に中学校段階の肯定的な回答割合・4層分析

年度・学年	川崎市	A層	B層	C層	D層	A-D の差
令和6年度・中1	80.5	82.7	82.4	80.7	76.0	6.7
令和5年度・小6	69.0	72.2	69.8	68.2	65.9	6.3
令和6年度・中2	73.8	77.6	75.1	74.2	68.5	9.1
令和5年度・中1	80.6	82.5	82.6	81.3	75.7	6.8
令和6年度・中3	84.2	88.3	87.1	83.7	78.0	10.3
令和5年度・中2	73.8	77.5	75.1	73.8	69.0	8.5

※「令和5年度・小6」の数値は、「令和6年度・中1」と受検者数が約 2,400 人異なるため参考値とする。

<分析結果>

表1、2「GIGA端末は学習の役に立つと思う」から、令和6年度においては、A、B、C層の児童生徒はほぼ90%前後で、GIGA端末は学習の役に立つと感じていることが分かります。一方で、D層については、A、B、C層の児童生徒に比べて、その割合は低い。

次に同一母集団の推移について着目すると、多くの学年でA層もD層も令和5年度から6年度にかけて数値は増え、また、A－D層の差は縮減しており、A層よりもD層の方が大きく増加している。一方で、現中2においては、どの層も数値が下がり、さらにA－D層の差の縮減も見られなかった。GIGA端末の活用について、小学校と中学校の活用状況にギャップを感じているものと考えられる。

次に、表3、4「前の学年までの授業で、GIGA端末などのICT機器をどの程度使用しましたか」では、同一母集団の変化に関しては、現中2を除き数値が高くなっており、学年が上がるにつれて、児童生徒が授業で端末を活用する場面が増えているといえる。一方、現中2の数値は令和5年度より下がっており、中1の活用が小6の活用より頻度が低くなっているといえる。「GIGA端末は学習の役に立つと思う」の結果と併せれば、活用頻度が下がったことで子どもの端末への有用感も下がったものと考えられる。次に、同一母集団のA層及びD層の推移に着目すると、どちらの層も活用頻度は上昇しているものの、A－D層の差は大きくなっている。授業で端末を活用した学習により学習の質が高まり、更なる端末活用に結び付くよう授業改善していくことが大切である。

<実態に応じた取組の工夫>

端末を活用した授業デザインにおいて、小学校と中学校とで情報共有を行い、その接続を意識した取組を考えていくことが大切である。今後も、推進協力校での授業公開等を行い、校種を越えて好事例の共有を行っていく。

GIGA端末の活用頻度と有用感の間には正の相関があると考えられることから、中1の活用頻度を高めていくことが重要である。小学校においてはアカウント管理等のスキルを着実に身に付け、教育委員会としても、アカウントや端末管理等の支援を行い、中1においても端末活用の機会を増やしていく。